

■随想

伊那山脈の最高峰・ 鬼面山に登る(下)

本多勝一 (高2回)

〈承前〉

樹木に目を遣り、鳥の音を聴く

ふりかえると峠の反対側たる赤石方面の山なみも見え
るが、主稜線はそれらの奥になって見えない。地図で一、
五八五メートルと示されている位置らしいところの三角
点に一〇時一五分に着いた。このあと急坂を少し下って
から、ひたすら長い登りが続く。古い鉄索が赤さびて放
置されているのは、材木を出したあとの不始末か。無責
任で見苦しい。

林が薄くなって展望がきくあたりに、アスナロと思わ
れるヒノキ科の木があるが、確認のため実や葉を写して
いこう。『長野県植物誌』(信濃毎日新聞社・一九九七年)
でアスナロの分布図をみると、ここもその範囲にはいる
ようだ。またヒガラの囀り。ここまでに鳥類の音として



●ほんだ・かついち

1931年大島村(現松川町)
生まれ。京都大学農林生物学科
卒。58年朝日新聞記者となり、
東京校閲部、北海道報道部、東
京社会部を経て68年編集委員。
91年定年退職。現在、『週刊金
曜日』編集委員。朝日新聞社友。

は、他にキツツキらしいのが一度あった程度である。
やや下った鞍部にダケカンバが三、四本あらわれたが、
このダケカンバは幹の色が比較的白っぽい。ブナの巨木
のそばに三角点。

登山道がやや北向きになるあたりにヤマブドウの大群
落があり、その彼方に仙丈ヶ岳や北岳が見える。このの
ヤマブドウは、こんなにありながらブドウの実がまった
くついていない。摘むには早すぎるから、採取されたわ
けでもあるまいに。これにも「成り年」があつて、今年
は成らない年なのだろうか。

両側から雑木がトンネル状にかぶさってくる感じの所
があり、ミズナラ・ブナ・カエデ・ダケカンバ・トチノ
キなど、紅葉の始まりかけた落葉樹林にモミ類も混じ
る。そのつづきに見事なブナが二本。そういえば、ここ
も、ブナの若木や稚樹がほとんど見られないように思わ



鬼面山の頂上

れる。

一九年前（一九九六年）、伊豆の万三郎岳に登ったとき、ブナが大木しかないので不思議に思ったが、ここも気候変動のせいなのかどうか、日本海側の多雪地帯のような稚樹が見られないのだ。道ばたに一升ビンが三、四本捨ててあって、ドイツではありえないことだと思ったりする。

三時間余りかかって、頂上へ

斜面がゆるくなってきた、頂上が近づいたと思われる正午すぎ、大休止をとってオムスビをひとつ食べる。おとなつかしやメボソの囁りだ。そういえばこのところ夏山にしばらくごぶさたしていたので、メボソさえ久しぶりなのである。

稜線に出た。そして間もなく櫓が見え、頂上に着いた。一二時四五分。やはり三時間余りかかっている。風速ゼロ。トンボが一匹往き来する。アキアカネの類らしいが、赤くはなくて黄色っぽい。同種のキトンボかもしれない。

一〇畳敷き余りの頂上の空間をかこむのは、ナナカマドやミヤマハンノキ・ミズナラ・ダケカンバ・モミ類などだが、いずれも低い幼木だから、展望をさえぎるほどではない。カエデの類が二種に、ゴヨウマツも一本。ヒ

メコマツともよばれるこの松は、父が盆栽のように庭でかわいがっていたことを思い出す、あれをゴヨウマツと知ったのは二十余年も後だった。

眼下に、豊かな広い谷の全体が……

さて、伊那谷の大展望である。木曾山脈は主稜の仙屋領から南駒・空木にかけて山頂付近が雲の中、西駒あたりも伊那前岳（二、八八三メートル）のほかは小型の積雲の中だが、越百山以南から恵那山まではすべて稜線が見え、この豊かな広い谷の全体が眼下にある。

そう。この谷の大きさ・広さについては前回（「稲穂」第5号）で述べたが、豊かさもまた相当なものだ。信州といえば寒いと思われるのが日本の常識だが、相対的には日本列島の中で寒い方ではあっても、伊那谷の冬は中信（松本・諏訪）より暖かいし、積雪量も少ない。伊那節でうたわれるように、養蚕業は収入を平均的に上げることになった。極貧層もなかったわけではないが、東北地方の農村に伝えられるような大規模な残酷物語にはならなかった。地主と小作の関係が大規模でなかったことも一因であろう。東北の農村でも、会津盆地のように自



然が豊かだと

残酷物語も少

ない。

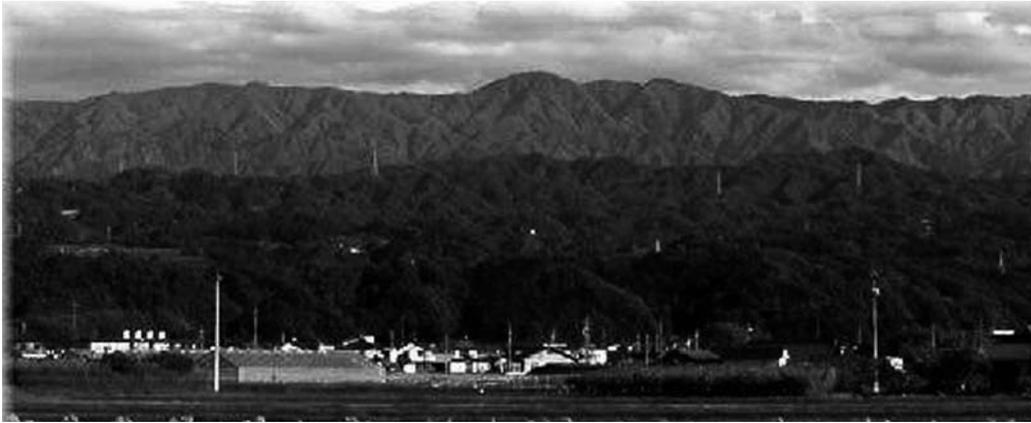
信州人のイカモノ食いは有名だが、とりわけ伊那谷でこの習慣は発達する。しかし思うに、これは食いつめた結果としての食習慣ではなく、好奇心とか偏見の無さといった積極的姿勢がもたらしたものではなからうか。俺たちとしてはハチの子であれゴトウムシ（カミキリムシの幼虫）であれ、イカモノとして食うのでは決してないのだ。

楽しかった少年時代の日々

眼下にひろがる伊那谷も、天竜峡以南は回春地形によって峡谷となるが、ここから見下ろす谷はそれ以北から辰野あたりまでの、「谷」と称するにしては広すぎる地形かもしれない。でも両側が「日本アルプス」に囲まれている条件からすれば、相対的には特別広いわけでもない。

これまでに実物を見てきた世界の大山脈、ヒマラヤやアンデスやアルプス等にしても、天竜峡以南のような峡谷がもちろん多い一方、それ以北の伊那谷のような広い谷もあって、そんなところに旧王国や地域住民のムラが発達していた。

その広い部分の伊那谷のほぼ中央部、上伊那と下伊那



伊那山脈を望む。中央最高峰が鬼面山

の境界に松川町（旧大島村・上片桐村・生田村）はある。

五メートルほどある櫓に登ると、松川町は木曾山脈の稜線に到るまでのすべてが見える。生田区はこの伊那山脈自体の山腹だから、足元すぎて尾根のかげだ。断層を成因とする河成段丘を松川が刻んで流れ下る様子。台城が天竜川に突出す

る保護段丘と、その北にひろがる旧氾濫原の様子。それらを見ていると、この舞台で釣りや火追いなどして楽しかった少年時代の日々が思い出され、つい感傷的にならざるをえない。

この旧氾濫原の多くは田んぼだから、いま稲穂の黄金色に満たされている。わが家はそこから河成段丘をひとつ上った縁ちかくにあるのだが、望遠レンズでようやく認められるほどに遠い。生まれてから高校卒業までの年月に眺めていた「東山」のこの鬼面山にいま立って、逆の側から生家を眺めているのもまたもうひとつの感傷だ。こういう感傷も、四〇歳代以前には山に登ってもそう強くは覚えなかったと思われる。やはり七三歳というトシ（二〇〇五年現在）なのか。

日付と「快晴」とだけ記帳して

どこか遠くからホシガラスのような声が聞こえた。こんな所にいるだろうかと訝しんだが、再び聞くことはできなかった。郵便受けのような小さな立ち箱に記名帳があつて、登った人の感想なども書かれている。やはり夏が多くて、数日間に一隊くらい登っている。「ガスで展望きかず残念」といった感想もある。俺も日付と「快晴」とだけ書いて記帳し、一時半ごろ下山した。

頂上のすぐ下に、テングタケ科らしい白いキノコが出ていた。これも毒を抜けば美味なのであろう。飯田市美術博物館の熊谷良一氏はキノコに詳しいから、写真にとつていつて教えてもらおうつもりだ。ほかの草木も、あやふやな種や知りたい種はあとで北城節雄君に聞くことにする。北城君は高校での同級生で同じ生物班と山岳班にいたが、大学では生物を専攻して教員になり、とりわけ植物にくわしい。

一、五八五メートル地点をすぎたとき、「ツチ、ジャージャー」とヒガラがすぐ近くで鳴いたと思つたら、目のサワラの小枝に姿を見せてくれた。ここで大休止をとつて残りのオムスビを食べる。

「怒・哀」よりも「喜・楽」と感じて

さまざまな喜怒哀楽の時間、空間をへてきた人生だが、山の奥深くに入るとやはり「怒・哀」よりも「喜・楽」の方を感じやすい。単独行の山中では歌い出したくもなるのだが、七〇歳代になってから声がいわゆる嘎れて、かつてのような自慢の民謡も歌いにくくなった。自分と言うのは気恥ずかしいけれど、知る人ぞ知る、これでも相当なものだったのだが。パキスタンのパンジャブ大学の講堂で、たつての求めに応じて安曇節を歌ったことも

ある（注一）。

声嘎れたのはもちろんトシのせいだろうが、もうひとつ考えられるのは七〇歳になった年（二〇〇二年）のイラク取材だ。クエートとの国境で、米軍のウラン弾にやられたイラク軍戦車の残骸を、ガイガー計数管で測定して歩いた。かなり強い残留放射能があり、それを浴びた結果かもしれない。そのあとから長らく体調をくずし、嘎れも意識するようになっていた。

歌といえば、プロの歌手でもトシは争えないことが、青春の思い出の中にある。シューベルトの歌曲『冬の旅』その他のレコード等で知られるゲルハルト・ヒュッシユは、日本で何回も公演したあと音楽関係の大学で教員にもなったドイツ人だが、たしか六〇歳前後になったころのこと、俺の古い友人で音楽通の遠田健君に会ったとき、自分の昔のレコードを聴いてつぶやいたそうだ——「ツヴァンツイヒ・ヤレ！」（二〇一年）

二〇年前の自分の若い声に感慨を深くしたのである。地藏峠に下りついたのは午後三時四六分であった。

（注一）…このときは松下進編「スワート・ヒンズークシ紀行」（三一書房・一九五八年）第一部第五章「ラホールの交歓」に出ている。